

物語の支え：文学理論の視点から見た日本語教育

ダリン・テネフ(ソフィア大学)

darin.tenev@gmail.com

2010年にノーベル文学賞を受賞したマリオ・バルガス・リョサには、1987年に出された『密林の語り部』(“El hablador”)という小説がある。そこにはアマゾンに住むマチゲングというある先住民の、共同体を維持・形成する上での語り部の果たす重要な役割が描かれているのだが、ある一人のアウトサイダー(「仮面」というニックネームで呼ばれるユダヤ人)が、その共同体の一員になってゆく話のなかで、そのアウトサイダーがその共同体に完璧に溶け込むためには、彼はマチゲングの言葉をマスターするだけでなく、マチゲングの物語を通過し、物語の世界に入り込んで、最後には自分自身が語り部になることを余儀なくされ過程が語られている。

いうまでもなく、バルガス・リョサのこの小説に触れたのは、言語教育には物語が必要であるというテーゼを提供したいからである。物語という言葉はいろいろな意味で使われているだろうが、ここでは、最も広義の、「ナラティブ」という意味で理解していただきたいと思う。この広い意味での物語はわれわれの言語意識の支えとなっていると、私はいいたい。これは必ずしも新しいテーゼではない。むしろ、西欧にも、東アジアにも、古くからある、常識のように見えることであろう。が、それは理論上、どのように言語教育と結びついているか、いや、結び付けるべきであるか、ということは、十分に論じられていないように思われる。本論文では言語教育と物語との関係を理論的に分析したい。しかし時間が限られているため、ここではその分析の基礎だけを記述することにする。

人間の経験において物語がどれほど重要なものであるかは、二十世紀後半以降、ポール・リクール、アーサー・ダンテ、デーヴィッド・カルなどによって論じられてきた。リクール(1987)は『時間と物語』において、物語こそが経験を整理し、調整しているという。人間経験は時間的性格をもっている。しかしそれは抽象的な意味での時間、あるいは物理学的な意味での時間を意味しているのではない。時間が人間的時間となるのは、物語によって調整される限りにおいてのみである、と。つまり、物語こそが人間的時間にその構造を与え、時間を理解可能なものとし、さまざまな形で時間を経験することを可能にする。われわれの行動や実践は物語によって前もって構成されている。しかしそれはある種の「理解の先-構造(Vor-Struktur)」を措定している。言い換えれば、われわれはある意味で自分のあらゆる行動や実践、そしてその行動が行われる文脈などを既に理解しているのでなければならぬわけだが、リクールはそういった、ハイデッガーに由来する「先-構造」をミーメーシス(模倣、まね、ふり)を通して論じ、ミーメーシスと物語とを結びつけるのである。のちほどまたこのミーメーシスの問題に戻りたいと思うが、ここで強調したいのは、物語と人間経験とのつながりの存在である。そういうつながりがあるからこそ、リクールは〈物語的アイデンティティ〉という概念を紹介するこ

とができたのではなからうか¹。〈自分は誰であるか〉という問いに対してわれわれが答えられるのは、物語のおかげであるという考え方であるが、それとともにその問い自体を組み立てることさえ物語を通さなければできないのではないかと思わせる立場であろう。

日本においては野家啓一が物語を研究し、リクールを受け、『物語の哲学』のなかで「「物語り」はわれわれの経験を時間的に分節化する言語行為である」²と論じている。野家はリクールに比して言語を中心に主張しているといえよう。言語行為である物語り（普通の言語行為と違う物語行為があると彼はいつている）は言語として他者の経験などをコミュニケーションすることができる。語ることによってわれわれの伝統や文化などが個人の主観性を超えた、間主観性のレベルで設定される。だからこそわれわれはそれぞれの〈言語共同体〉（それは野家の言葉であるが）の内にいるのである。「「語り」は「加担」に通じることによって、経験や知識の共同化を含意しうる概念なのである」³と彼はいつう。無論、知識を伝達することは必ずしも物語を必要としないから、引用した言葉は誤解や曲解を招くであろう。誤解を避けるためには共同化することと知ることを区別すべきである。個人的な解釈に過ぎないかもしれないが、おそらく共同化のほうはひとつの事実を知ることだけではなく、その事実の文脈、その事実とその前・そのあとの事実との連関、さらにはその全体の事実が了解されている、理解されうる状況、条件などがわかるようにすることも含意していると思う。極端に言えば、物語は知ることを可能にするのではなく、わかることを可能にするのであろう。しかしそれはそうであれば、物語は単に勉強や研究の対象だけではなくして、勉強や研究の手段であるといえよう。上記に引用した野家の文は次のように続く。つまり、「「物語り」はわれわれの経験を時間的に分節化する言語行為であるとともに、その存立構造を解明するひとつの分析装置でもあるのである。」と。分析装置である限り、物語は勉強の道具としても使われるであろう。なぜなら、物語を通して、外国語や外国文化を学ぶ者は勉強していることの全体性といわなくても、少なくともその連関性がわかるための道具、分析装置を手に入れることになるからである。

周知のように、言語を教えることは必ず言語に対するある種の言語学的理解や言語哲学を前提しているが、カリキュラムなどを作るとき、反省的にその理解や哲学を十分解明しなくてはならぬ。現在もっともよく利用されていると思われる言語観はおそらく語用論であろう。簡単に言えば、言葉は自ら意味を持っているのではなく、その文脈やその使い方によって初めて意味を負う、ということである。ウィトゲンシュタインとオースティンがその考え方の哲学的基盤を作ったといわれる。言語ゲームや言語行為といったような概念で知られている。オースティンによれば、言葉は陳述するものだけではなく、行為するものである。命令することや約束することや侘びることなどはある状態についての陳述ではなくして、まさにある状態に対する行為なのである。そういう意味での言語行為はもはや言われていることが真実であるかどうかを問題にしない。成功しているかどうかの問題である。いいたい

¹ ポール・リクール（1996）を参照

² 野家啓一（2005）、300頁

³ 同書、110頁

ことが通じているかどうか。部長が部下に命令したとき、その部下が「部長がまた冗談を言った、笑わなくては」と思ったら、おそらくその言語行為は成功しなかったといえよう。しかし、成功するには辞書に載っているその言葉の意義以外にも、いろいろなことが必要である。誰（どういう立場の人）が発言しているか（部下が部長に命令しようとしても、成功しないだろう、むしろ首にならなければ幸いだ）、やどういう文脈で発言しているか（悪いことをしていない人が詫びてもあまり意味はない）、や発言するときに働いているコンベンションはどのようなものであるか、などなどを踏まえたうえで、われわれは発言する、そして話すことで行為しているわけである。日本語の「失礼します」や「御免なさい」や「すみません」はどれも日英辞典によれば、Excuse me という意味だが、いつ、どういう場合に使えばいいかということをお教えるにはやはりそういった表現を言語行為として理解したほうがよかろう。

言語教育における言語行為論の役割の重要性はいまさら説明する必要はないだろう。そして本論文の目的が言語行為論の分析ではない以上細かいところには立ち入らない。重要なのは、語学には言語行為論でさえ十分ではないということである。なぜなら、言語行為論は発話を、原子のように、それぞれ単一の行為として取っているからである。詫びや依頼をすることなどにはそれぞれの文脈があるだけでなく、通常はそれぞれの行為に続く、少なくとももうひとつの言語行為があると考えられ、たとえば言われた詫びを認めるか否かによって決まる発話、依頼を聞いた後の反応、等々の行為を還元してゆけば、言語行為自体がわからなくなるぐらい抽象的なものになるのである。言語行為はそういう意味で、原子にたとえるよりは、分子にたとえたほうが適切であろう。つまり、それぞれの言語行為は連鎖をなしている、そしてその連鎖のどこにあるかによってそれなりの意味や発話内行為の力が定められるということであろう。

ブルガリアの社会学においてトドル・ペトコフ（Todor Petkov）とデヤン・デヤノフ（Deyan Deyanov）という論理学者は「分子的発話行為（*molecular performatives*）」という概念を紹介して⁴、発話行為連鎖の成り立ちを研究して、単一の伝達行為の文脈より広い文脈を前提とする相互に連続している発話の性格を分析している。一方では、エスノメソドロロジーの学者たちは日常言語行動の分析と会話分析を進展してきた。ハーヴィー・サックスやジェフ・カウターが会話分析を通して日常言語行動の内生的論理を明らかにしようとし、発話の連続位置の重要性を強調してきた⁵。

〈分子的発話行為〉や〈発話の連続位置〉という概念は言語行為論に比して言語行動と日常活動・実践（プラクシス）のつながりをより明確にする。上記のように、ある言語行為を理解するためには、言葉以外にもいろいろなことがわからなくてはならない。文脈、コンベンション、言語行為連鎖の成立、等々。しかし言語行為論も、エスノメソドロロジーもそういった文脈などがすでに行為者とその行為に関与する者によってプラクシスの中で理解されていることを前提とする。そしてその理解の可能性、あるいはその理解の上での行動を理論上に分析しようとしている。

⁴ Todor Petkov（1998）を参照

⁵ Jeff Coulter（1991）を参照

が、言語教育の場合、外国語を学ぶ者にとって(特に文化が大きく違う場合)そういった文脈など、いわばプラクシスの前提する連関・ネットワーク・全体性がわからないといってよかろう。いちいち説明してみても、どれもおそらくわからない。なぜなら、いちいち説明しても、全体性が欠けることには変わりはない、そういったものがプラクシスとして経験され、理解されるものであるからである。わびること、謝ることはそれぞれの文化において違う意味を持っている。土居健郎の名著『「甘え」の構造』の冒頭を参照すればすぐわかることであろう⁶。もちろん土居の本を読んだ人にはわかる。外国の人であっても、きっとわかるであろう。なぜなら、それはひとつのストリートとして語られているからである。物語を通して紹介されているからである。だが、なぜ物語がこういう機能を果たすことができるのか？

日常生活において道具を使うとき、われわれはそれらを何かのために使っている。ドアの取っ手を握るとき、それはドアを開けるためである。その取っ手はそういったプラクシスによってわれわれにとって意味を持つ。だとすれば、取っ手というものは抽象的に意味を持つのではなく、ドアとの連関で意味を持つ。しかし、ドアも我のいる部屋とその部屋の外側にある廊下との間にあるもので、その位置がわからなければ、ドアの意味もわからないであろう。そして取っ手の意味もドアのその位置がわかっていなければ、わからないだろう。そういう風に普段われわれはプラクシスのなかで個々のものつながり、ないし連関をすでに理解しているといえよう。(いうまでもないが、それはハイデッガー(1994)のいう「理解の先-構造」Vor-Strukturである。お分かりのように、この段落で私はハイデッガーの議論を簡単に述べているに過ぎない。ここで連関で表している言葉は趣向性(Bewandtnis)と趣向全体性にあたる(『存在と時間』第18節参照)。その連関こそがそれぞれのものが何のためにあるかを明らかにするのであるが、それと同時にそれぞれのものに還元不可能な何か、ある種の全体性を暗示している。暗示されている全体性は個々のもの、道具の間の連関を通して、生活世界の統一性を構成する。)

言葉もある意味で同じように機能しているのではないか。一方では、他の言葉と関連しながら、他方では、生活世界へ指示し、われわれの周りにあるものやわれわれの行為と関連する。つまり、上記の全体性によって条件付けられていて、その全体性を暗示している。このことは言語行為論やエスノメソドロジーから簡単に演繹できることであろう。

以上のことからして、言語教育のひとつの大きな問題が見えるようになったと思われる。それはつまり、言語を教えるときには、どのようにそういったプラクシスの前提する全体性を、それを経験していないものに伝えることができるか、という問題である。私が提供したい答えは、予測できるように、物語をもって、ということである。

しかし、物語においてもその全体性が欠けているに等しいといえる。ならば、どのように他ならぬ物語を通して、外国語を勉強している者にその全体性を提示することが可能となるか？

⁶ 土居健郎(2000)、1-22頁を参照

文学理論においては、語られている諸々のことの間には非連続が存在するということがよく指摘される。その非連続のゆえに、読者が諸々の出来事の間潜在的つながりを再構築しなければならない⁷。そういう意味で、物語におけるつながりは静的なものではなくして、動的な性格を持っているといわねばならぬ。この動的な性格によって非連続の連続を組み立てることが可能になる。(野家啓一も物語における非連続の連続について述べている。)その連続が潜在的で、動的である限りにおいて、物語の地平というものは開かれているといえる。(このようにいえるならば、開放の状態に置かれている、といてよい。)物語に欠けているこの文脈や連関は普段の生活世界の中では全体性が暗示されているのに対して、物語においてはその欠如は潜在性の地平を開くのである。潜在的なつながりが物語の統一性を形成して、その背景に存在する。

一言で言えば、**物語は欠如している文脈などを動的なつながりによって満たすことで統一性を形成する。**

いうまでもなく、その統一性は完全な統一性ではないが、読者自身がその形成に巻き込まれていることから、彼、あるいは彼女、が自分の能力で、物語において潜在している理解の先-構造(Vor-Struktur)を再構築し、解釈し、結局使えるようになる、とおもわれる。すなわち上記の全体性と直接に接するのではなく、間接的に、その欠如に触れることで、外国の言葉の背後にあるプラクシスの世界がわかるようになる。

その過程で読者は(ここの議論は外国の物語を読む者に限られていない)ものを学ぶことになる。ここでいっているものを学ぶことというのはミーメシス(ふり)とつながっているが、もっとも深くその関係を分析したのは、おそらく坂部恵である。彼は『〈ふるまい〉の詩学』(坂部恵、1997)という本の中でアリストテレスの『詩学』を解釈し、ものを学ぶことはまねび、つまりまねしてならうことであると主張して、〈ふる〉の概念と結び付けるが、彼のいう〈ふる〉はふるまい(プラクシス)に先立っていると論じる。(すなわち、ふるまいがあって、それをまねするのではなく、「むしろまさに〈ふる〉というより基底的な成層ないし構造契機があって、その上にはじめて〈ふるまい〉が〈ふるまい〉として日常生活の表層で構成・統御可能となる」⁸)それゆえに、まねびにはもともとモデルが欠けている。欠けているからこそまねびの過程の中でそのモデルが作り上げられるのであるが、それはまさに物語の持っている潜在性と類似しているような過程であると論じられる。

上記の統一性や全体性など、抽象的で、形而上学的に響く言葉が多いだろうが、実際には具体的な経験に基づいた議論である。誰がいつどこでどんなことを発言すればいいかは物語ないし小説には理論的に説明されていない一方で、どの場面でどの人物が発言していることによってほのめかされているとはいえる。ほのめかされているというのは、ルールとしてあるのではなく、生き生きとした言語に潜んでいる可能性として存在するということであろう。この潜在性は到底抽象的なものではありえない。なぜならそれは歴史的に、通時的に定められているからである。物語を通してある出来事を理解

⁷ この問題がヴォーフガング・イザー (Wolfgang Iser, 1978) によって最もよく論じられている。

⁸ 同書、4頁

するために、その統一性を構成しなければならない読者にとって、その場면을記述する言葉、その人物が使っている言葉などが、統一性を構成していく過程の中でだんだんわかっていくといえる。いい換えれば、文脈やコンベンションや言語行為連鎖の成立などがすべて見えてくる。そして統一性を構成することで読者はその言語のもっている潜在性・ポテンシァリティに「潜る」のではないだろうか。社会的ヒエラルキーに関する理解、男女の役割に関する理解、葛藤や口論に関する理解など、そのようなものが深まるのではないだろうか。さらに、日本語の場合、物語を通して日本語の人称や動詞のテンスやアスペクトに対する理解。たとえば、「タ」は単に過去をあらわす助動詞ではないことなどは、物語を読めば読むほどわかることである。古語の場合、「キ」、「ケリ」、「ツ」、「ヌ」「タリ」のような助動詞はまさに物語がなければ、現在明晰になっていなかったであろう⁹。

物語は上記のこういった意味で言語教育に必要とされるのである。

しかし、気をつけなければならない点がある。物語は虚構の小説（フィクション）をも含んでいる概念である限り、物語の言説を単に日常生活言語と同一視してはならない。なぜなら虚構の物語に使われている言葉には（ジョン・サールはそれを否定しているが）それなりの特徴があるからである。ケーテ・ハンブルガー(1986)が指摘しているように、虚構の物語は現実の言表主体（Aussagesubjekt）を必要としない、そのかわりとして虚構の私-原点（Ich-Origo）を導入する。それゆえに時制の持っている意味などが変わってくる。虚構の言説のこういう特徴のせいで虚構はその性格を露呈し、どんなコンベンションをもってそれを読むべきかを読者に示唆する。

さて、簡単に要約すれば、普段われわれは生活世界の中で個々のものや言語行為の意味をその趣向性、それらが暗示している連関ないしネットワークのおかげでいつもすでに理解している、物語においてはその趣向性が前提している全体性が欠如している。物語は欠如しているその全体性を潜在的なつながりによって満たし、動的な統一性を形成することで、言語を理解するために必要な文脈やコンベンションや言語行為連鎖などの再構築を可能にする。外国語の学習者にとって、それは言葉の意味をより深く理解する機会であり、その国の文化によりよく接近する機会だといえるのである。

最後に一言付け加えたい。外国の人にとって日本語は密林である。「ユカ」という植物の名を知ったからといって、この植物は何に使うか、どのように栽培すればよいかはわからない。ある蛇の名を知ったからといって、その毒に対する解毒剤にはならない。日本語の密林に立ちいるには、その密林の物語を通さなければならないであろう。

参考文献

ケーテ・ハンブルガー(1986)『文学の論理』、植和田光晴訳、松籟社

⁹ 藤井貞和(1998、2010)を参照

- ポール・リクール(1987)『時間と物語 1』、久米博訳、新曜社
- ポール・リクール(1996)『他者のような自己自身』、久米博訳、法政大学出版局
- マルティン・ハイデッガー (1994) 『存在と時間』、上下、細谷貞雄訳、ちくま学芸文庫
- 坂部恵(1997)『〈ふるまい〉の詩学』、岩波書店
- 土居健郎(2000)『「甘え」の構造』、弘文堂
- 藤井貞和(1998)『古典の読み方』、講談社学術文庫
- 藤井貞和(2010)『日本語と時間』、岩波新書
- 野家啓一(2005)『物語の哲学』、岩波書店
- Jeff Coulter (1991) “Logic: Ethnomethodology and the logic of language”, In: *Ethnomethodology and the Human Sciences*, ed. Graham Butten, Cambridge, Cambridge University Press, pp.20-50
- Wolfgang Iser (1978) *The Act of Reading. A Theory of Aesthetic Response*, Baltimore and London, The Johns Hopkins University Press
- Todor Petkov (1998) “From Austin and Bourdieu to the Logic of Molecular Performatives”, In: *Anthology of the Summer Novossibirsk School ‘Communicative Strategies of Culture’*, Novossibirsk